

開梅花

安永六年丁酉

元日

表里

照降の挨拶はなし今朝は云

中ものこわさ様あふ友

兼佳

夕たのりあひ百あれ 晴く車直

二

兼住

初鶴や家も後さひも初ふ色

年の頭と鼓つら万葉 車直

棟上れ江連の辰と初めん兼住

三

車直

物と年とそく一夜や明は春

二宮母の枝りともか倉む梅 兼住

南窓のく暖又吹とめて 兼住

宇多又清湯三清也

煖いまを隙乃風を金部 里笑

あまのついでついで母の年七世 芦子

身立てついでついで隙秋は鐘屋敷 露曉

日

九月より松使と結

年の月小名使あり宝船伴島

采目

新町の新宅やと朝れま乃名 曇之

門まれ調子を合をこゝ家 雨柳

うゑ日

貴一門まをふ代の松あり 柳之

唐の梅まあじかまをれ 花門

え日やあまより人の笑初 桃枝

え日より皆あまより人の心 魚子里

宋本子名

積出さんまこれ仕合も至船 豊之
ままといふ名入をきん年の辰 辰柳
樂しひいそり中ま何ら妙之が 柳之
思ひありましむもは也年れ言ふ 心
ままま米本のうぬすも出ぬら 年辰桃枝
来年へ志川心あり時中ま 豊重
年ちちち竹の福来れまの 名 双魚

え日

ままま

積帳や余りく我れれ年始 至
え日やうはらま紀人合後 魯別
まの事を信ひひは神をまはま 辰柳
まのふらまのや帳合の門は 豊

宋本子名

振舞の妙えまのまのま 日

中よむいさや磨うへらり 五柳
掛らるも樽へ入ぬ陳夜の種 身外
し年忘るや中はくたうは 玉

糸本日

親の存し者糸はあまの雑草が 奥深

さへ日

若き時よは布子や家より衣配 日

糸本日

は糸節

格別もゆやへはなされ雨のま 風流
初雪やう庭小生髪は梅の星 桃秀
まなまのなまらや田舎浪あゝ 如行

糸本日

たふらふれゆくやし年の梢うら 日
たきちる様や藤井野ひ掃 桃秀

とくじ有法あり年々後味實 風席

とくじ

遠目後味實と云ふは風は邪如し

とくじ

仙枝亭

けはつり毎と行はしと和のま 三才實

とくじ

射愛いら的とも柳や年々日

とくじ

え初や年小一夜の天紋日如矢

とくじの年小一夜の年々卦の
とくじの年小一夜の年々卦の

とくじ

初らまのく如日陰家く海入り 去山

とくじ

節く初らまの如日陰家く海入り 去山

とくじの年小一夜の年々卦の

併指やうし年乃及むひ糸織
十餘段程に候ハ沙をすまひ糸里
鞠と候あ日ともさうと大世日鬼行
たうし年と氷きと沙之川糸織

よか

おきしと雪の京山と年とあ 麦里

し年尾

六東橋殿と申

年中れのひらきと大世日 抵古
併花やうし柳のいと橋 花標
橋と日といとあもよまれんもち 相ふ

しはあし年のあし
しはあし年のあし

年の棟やうしあ様のと所 度父

しとと

吹よとらまへし柳那 柳風
 春風や日日出るかゝるま 春夕
 夕の月をまぬの柳那 水
 昔あはれの錦を身や細なれ 玉襟
 名刺たる紙子もほに梅のふ 瑛古

長歌
 年内をよま

佛たうちをたうちの年れ雲 桃水

采本南

ねほひ並木とよまそは越山 練石
 比叡のまほほれ京あは煉拂 去雄
 ち柳分や拾ふ禪を白兔の首 其梅
 山前草屋の裏表衣とりと年忘 百花
 十まこりふ君をたゆ夜し歳より 金暎
 膝れ目のうをほほむつとお雪 春石
 け延目の様の後乃南と柳 大可

歌仙

きんかみ

たふ

乾鱈を和くくあまの氷の如

あまのうらまに竹塚の也

歌はききりれあまの松の如

まゝのうらまにうらまの松の如

一ねのうらまにうらまの松の如

藤巻を所のとあまの松の如

歌はききりれあまの松の如

とまの松の如乃見の松の如

藤巻の如乃見の松の如

細の松の如乃見の松の如

類の松の如乃見の松の如

尾の松の如乃見の松の如

むらの松の如乃見の松の如

さきよゆいいふふ〜〜い〜

肩て腹ちる流るるの秋の積

いの川れとちひさき〜〜

流るる雨の長降と〜〜

さ〜〜と柳とこれ位の

梅もら鞠も、梅もさき〜

も別〜流のそれ〜〜

う流るるい〜〜とさ〜〜

温泉の比〜〜と水た〜

樹の上貴〜〜と白桂〜

郭〜〜と〜〜と福〜

衣〜〜とさ〜〜と老〜

袴のぬれと〜〜と〜

曠の時長〜〜と〜

瀬田の秋も思ふ下石山月
わさめし波音もわね葉の聲
咲ちゆく後も詩小僧の菊
よき世小僧の園傍の曲も思ふ
まあもはる小僧も折あり
志しけむに思ふまゝの心
つしあめし心をも思ふ
念佛の心なごころの思ふ
昔も程れこころの思ふ

上巻

上巻の思ふも思ふ柳の
と散入の思ふも思ふ
顔の思ふも思ふ馬士も思ふ
下巻の思ふも思ふ

茶本言

川の瀬のまきいれおれあなかりあ私耕
森はく舞いし年のうれ山 麦畑
行へる燦のまへり首をれ 文器
まへへるくまれあまやあ納免 囁園

冬吟

あなまを今つ切まふはな 仙子

茶本日

丹波後部連

起るまかまふ月水のけいそう 如鼻
初宮の上下て紙を捲け 舌 千金

茶本言

燦をたや日和と肉のまのて 日
以年のあ戻りまを元のあはま加馬 如鼻

茶本言

ま風の吹く高き水郷に今

冬吟

ふ川の舟より望む見や伊豆山日

朝霜や何ぞ得た石と此 如泉

鷓鴣

鳥の啼く初日は 明鳥 薙長

光の初日は 明鳥 薙長

ままのふくまのれれ者なり 其秋

長巻の西水の明の先社より
稲のらの小祠をまわるとその
去年年々しりの母も月一
陽をけつんを神歌の恵は
とくり又とくりまわるとかん
かまのくのまをまわるとか

ままのふくまのれれ者なり 川路

冬吟

ままのふくまのれれ者なり 其秋

采夕

いと掛取抄してとて年より 其結

掛とておれ侍さるゝ侍と袖 薙長

書ちていふ事れと侍さるゝ侍と袖 其後

除却の灯やおつた年と申の尻 川路

去真

結末の末めくたせや白ひひり 其結

去りていふ事れと侍さるゝ侍と袖 其結

冬吟

そよひやれや枯草のうらむれを 其後

采旦

何列侍集

なつとれと目之二のうらむれ

其の侍さるゝ年を侍さるゝ侍

家身少を侍さるゝ侍 初八夜 仙路

宗本目

以列を根ま

書初や一原え事は筆は勢 柳雪

神のしは臨し初は門の虫 呂好

福書あれ書り文はわはる神 礼雪

人のまこと書り成るり事は去 乙来

男とまへつことさし何たりと物のみ云 五仲

かきらねくし物んる老門は前 一何討

又筆のし書りなり年むれ春 玉里

そはく老とそそめは

日出るはしは是なる腰弓始 湖月

年南

年忘しはは様をけく日那 花智

十掃や捨るは残る身のみ書 五仲

まら掃やのしは下せ玉は記 一何討

くひまらりふらる信の文敷部 湖月
燦々たる指の障のた鬼の中 三木
高きは神保のあふ妙きふ 玉皇
下戸もあらわつた酒平の志 長好
子供等のあふふせり一年の言 柳野

上巻

春笑わぬ日ふらつる雪のうた 花雪

中巻

丹後田代

雪のふりぬるはらり 繩 以羅

下巻

法甲斐のふらふと年の情を 秋 明志
せりさむらひ編あつて 以羅

ち春を流 日中良漆

阿まき野のふらふ日 文枝

平本と

えん日や天門のふ松と年 氣塔

平尾

辯士の突息をせりり妙之無日

平本

昔あけふやけは雲て身古い夏 船老

昔あけふやけは雲て身古い夏 船老

去雨や作事ふ流る年一山 氣塔

人々の志暫れ披る初梅 文枝

平本目

丹波山家

大福の中さうし平の催花あね 蒲大

かきか

くしゆを踏く見さう穂長さ 日

元日

丹波福童山連

古今たはぬことしめりし門乃る也 柳雨

采女

御んしとらるる采女

うらやまのこころはなほはるの年の川 日

一と真

あまのこころはなほはるの年の川 日

采女

し年の川にうらやまのこころはなほはるの年の川 日

あまのこころはなほはるの年の川 日

み抱

はるの川にうらやまのこころはなほはるの年の川 日

はるの川にうらやまのこころはなほはるの年の川 日

はるの川にうらやまのこころはなほはるの年の川 日

はるの川にうらやまのこころはなほはるの年の川 日

はるの川にうらやまのこころはなほはるの年の川 日

燥かろりとを交る市場那 雙成

書真

雨晴又先の降りりまきれ皆 日

ふあ地下駄のちこく 勤くま具 士口

穢れやも湿羅れあ地降初ぬ 鄭波

ふまやあこ地石の間は結る雪 結雪

小原あれさく糸やあまのま 洞あ

草のうら白とよぬ 川挑来くれ 笠山

ふらりと野はけさるわまは地 李煖

五言五句

丹波 宗清村

ねらりのあらまるとあま出たやま 山屋 鳥籠

後まふまはれはくく

いらふむよはらひと惜後まら 松波

日 長田村

先程ふまはれ始や 唐蘇の酒 東羅

采本子言

以年とて言ふとて並み大なり日 采歌

詩や歌と清く言ふは年とて 松波

以年とて言ふは年とて言ふ 松波

采本

采本とて言ふは年とて言ふ 松波

采本とて言ふは年とて言ふ 采歌

采本

初采とて言ふは年とて言ふ 松波

采本とて言ふは年とて言ふ 自始

采本日

丹波馬場村

採傳

采本とて言ふは年とて言ふ 自轉

采本

采本とて言ふは年とて言ふ 日

鶴旦

丹波馬路

此の世のふれわしむ初乳者 思新

又此の世果むむ初日部 吐月

一年迄

驚く越すと人よ後迄と年の夜 日

是の世を拂く多きとや神居者 思新

一年旦

丹波馬路

と後へのたらふこと初の日 日鳥

今初まけくを鳥も何初は夜 於花

もあふとく福の名あはれ目出たれ 曉里

一年迄

矢野れ子の世をよとく初の様拂 日

あふとくをよとく初の様もあふ 好む

舟のまはりに記すもつや年の川 江島

舟本日 丹波河原尻

美夢ふよまのさうりりねと年 才之

と記す母れよめさむと船のま 蒲口

あふ

年せりーのさへさのふれはる 日

車ゆはかよわあ年ね板 才之

舟日 きた根生原漆

くさねよまの鶴のねまや明け去 湖原

とけりつて夢面しうまひ初み如也

うら日や門後のまを世といのり うら改 其折

え見やし年とーのなうく 其石

長因まよる後とーうま明のま 龜岳

か加目出さう旅もなれ所 日

大いよれ旁うもつ鞠よら美と原と 美里

松本を名

標掃でほりぬし家し年れ名 松重
標花のまへへはくさむも係れ 王石
たを基り年れ免ぬらん標の名 子柳
標れさるん心ゆかきと掃ふ名 森由
名所を名わたり結よと久き名れ徳達 湖原

大ゆき名

ゆいし名れゆいしゆれ名 松重



兼住

ゆいし名れゆいしゆれ名

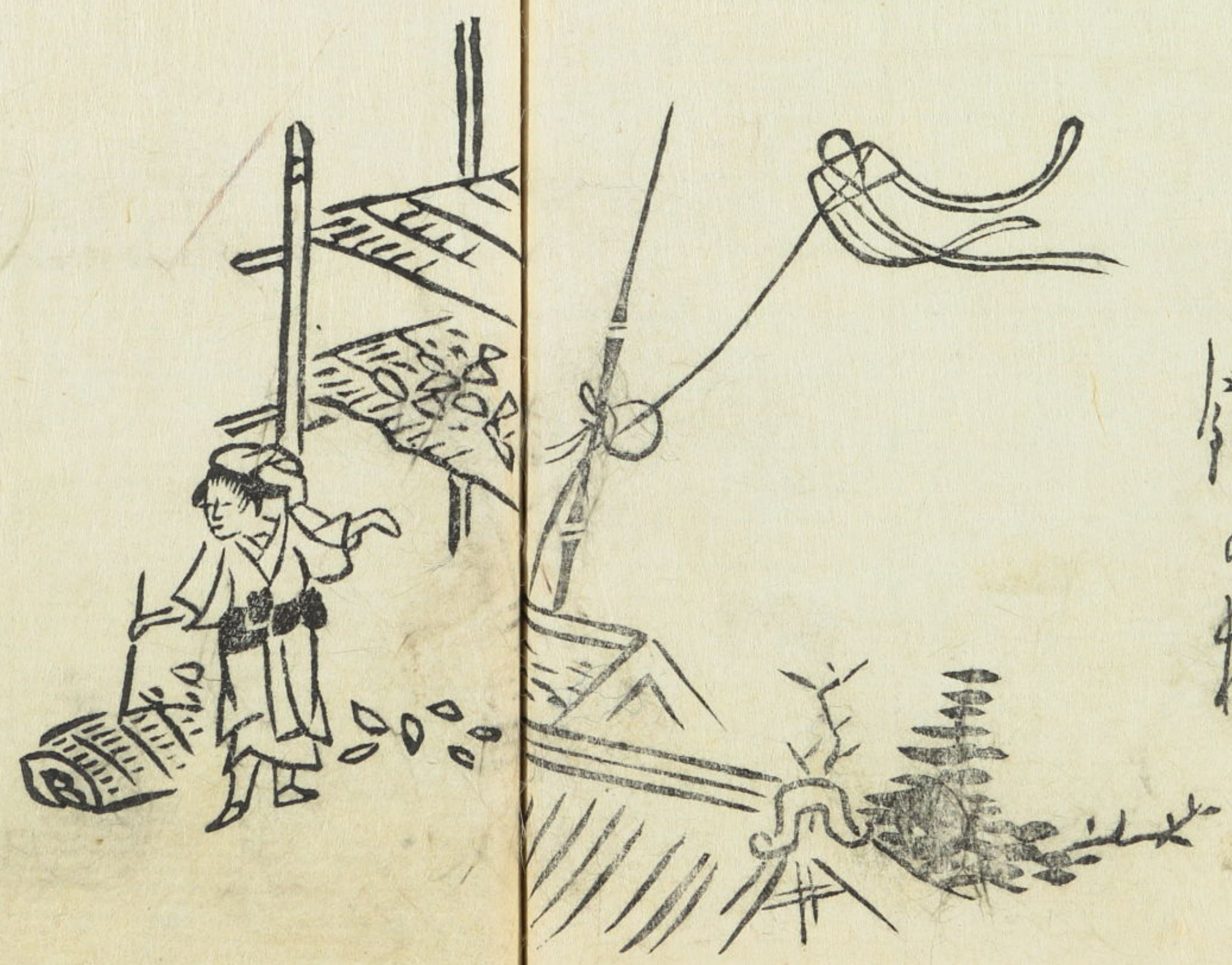
拾遺名れゆいしゆれ名

兼乃
ゆいし

あやた日菊う暖や

餅の梅

至



紫と赤い

色ふくむ花のや

梅の花

如鼻

毒候の格多し其の
あはれしき



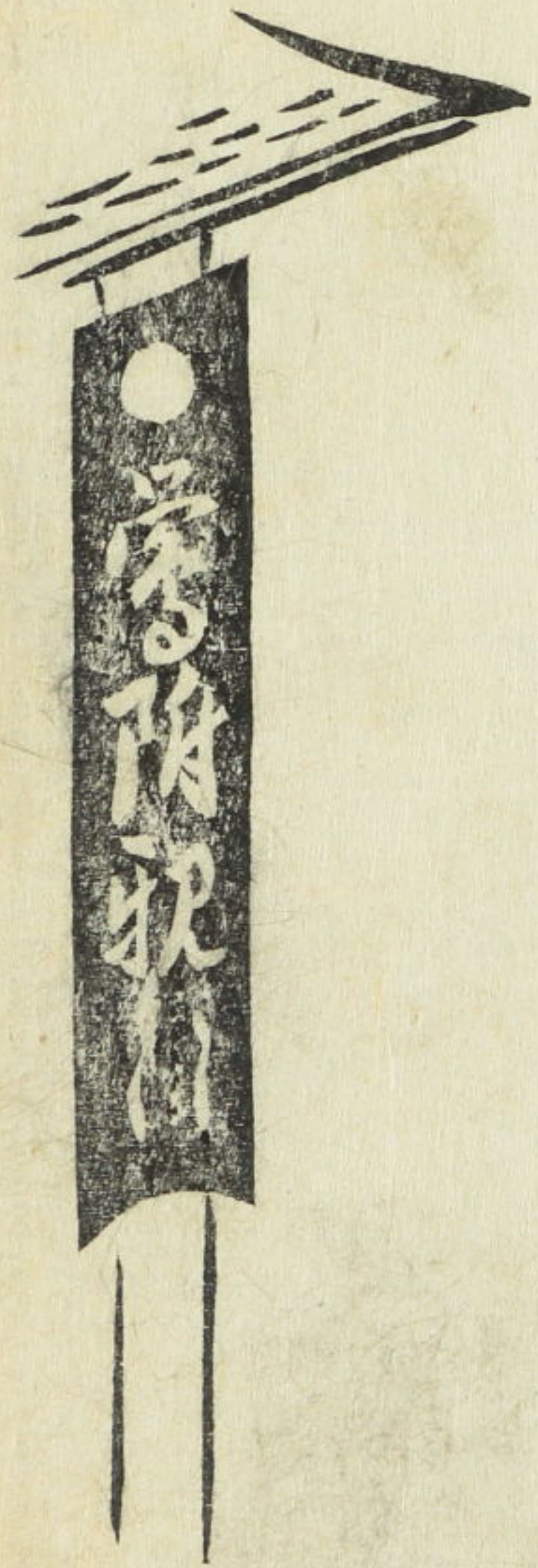
其候

玄園の生書

毒候者
男



二鶴十角



廿八

よき身にしる氣修り
森のたかき部

三ノ角

園れ取

夢のつらさ

うめのと



二ノ角

毒あけ

まろくね

あけ

噴藻



凍りし

あけ

あけ

噴藻



曙石

のしをき

白心那

宗美



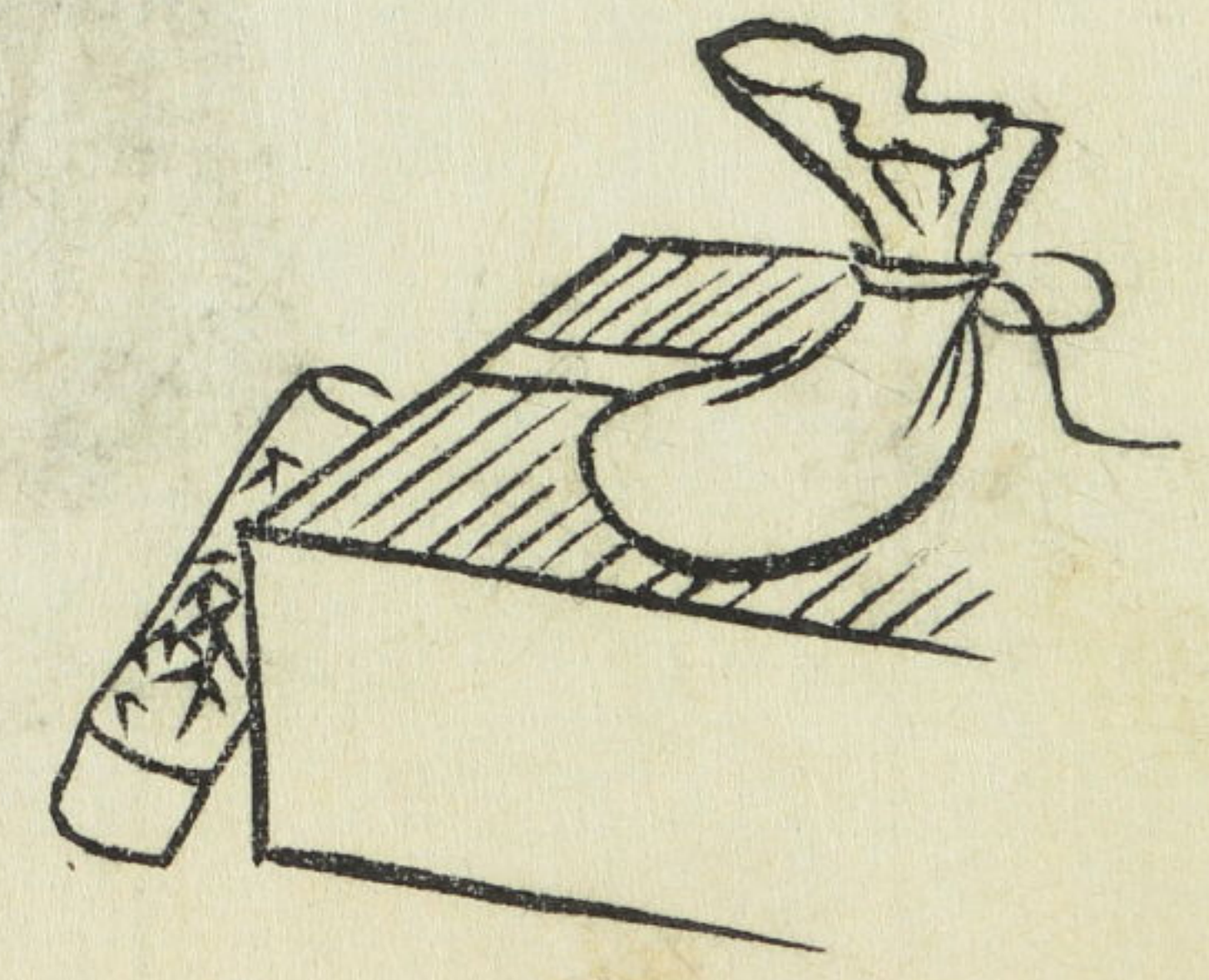
其白丸

園

のしをき

其白丸

魚目列



芦子

毒の
まね



湖山

毒の
まね

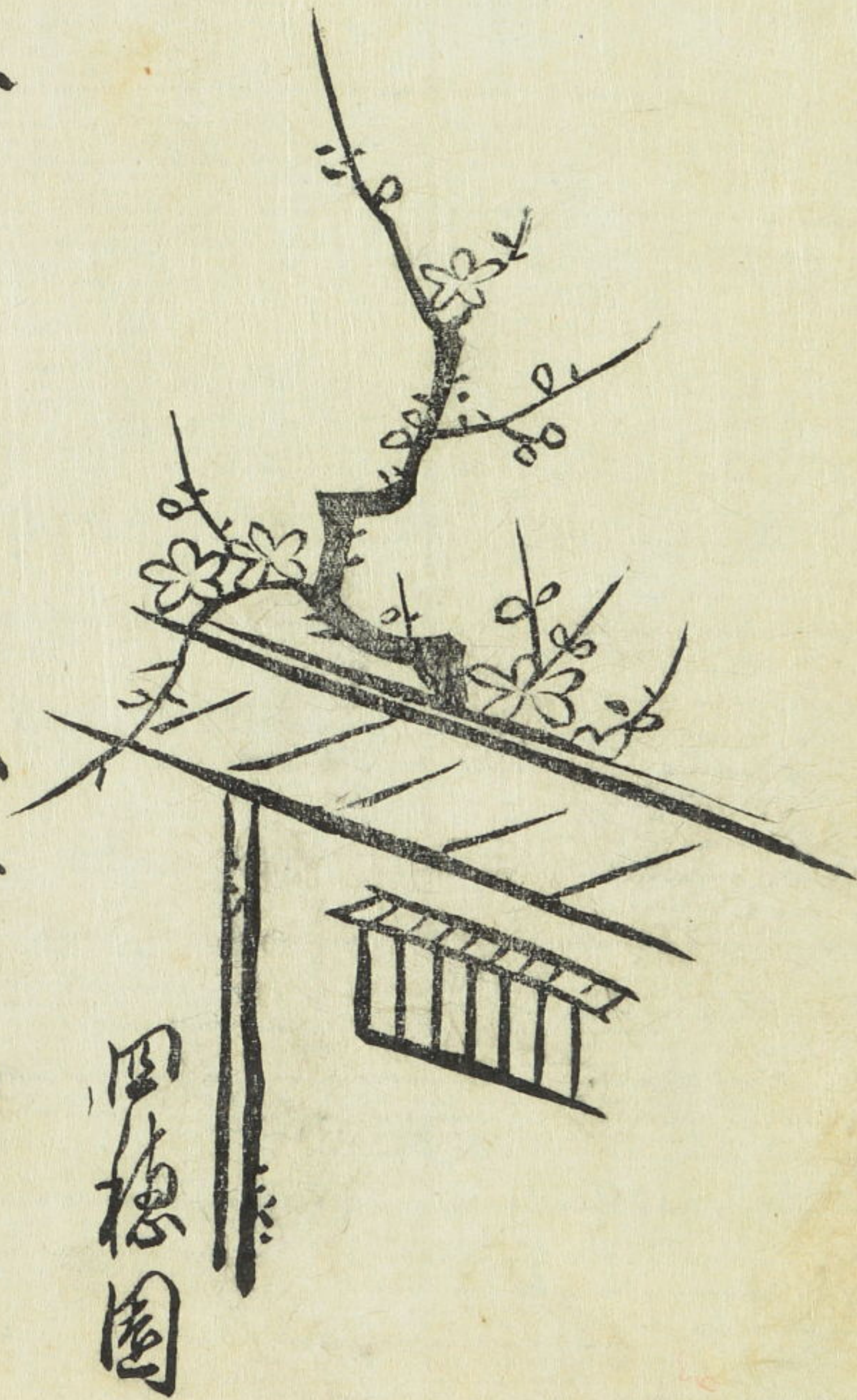
ぬの
まね



京蛸薬師堀川東命

吉田九郎右衛門梓

上巻之巻也
月公所の
朝也



田徳園

